
時間を止める瞳

水野光晋

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時間を止める瞳

【Nコード】

N4140F

【作者名】

水野光晋

【あらすじ】

時間を止める能力を持つ男の情報を提供すると100万もらえるという記事を見た、影野は、調査を開始する・・・だんだん姿を現していく能力者たち、影野は、能力者たちの共通点にきずいていく。

ブローグ

ブローグ

右目が痛い、ドロドロと目から血が出ている、それをタオルで押さえても血が止まる気配はない、白いタオルが見る見るうちに赤く染まっていく。

血が止まると次にやってくる痛みは想像以上であった、熱い、熱い、着ている服が汗でびっしょり。ぐはっ、口から血を吐く。

痛みがなくなった、体が楽になったようだ、今度は逆に寒い……鏡を見ると右目だけ紫色に……

1

雨が降っている中を傘をささずに、歩いて行く……。服が雨で重くなっていく、靴が水浸しで気持ち悪い、まっすぐ続いている一本道車も、通れない道をただ一人で歩いている……

2

俺は、いつものように、デスクに座ってパソコンに、いろいろと記事を書いている。最近、面白いネタがないから、こちらとしても事件が起こってもらいたいとここまで思ったことはない。自己紹介がおくれた、俺の名前は、影野 要、フリーのジャーナリストとカメラマンをしている、最近、本当に平和だ、事件や事故が何一つも起きていない、それは、平和だということだが、俺にとって平和という言葉は、食えないという言葉とむすびつく。

1時間くらい、ネットサーフィンをしていると面白い記事があった。

影野

「時間を止めれる能力を持っている男の情報がほしい、情報提供者

には・・・・・・100万円もしくは、それ相応の金額を提供します・
・・・・」

半信半疑だが俺は、明日から、時間が止められる男のことについて調べることにした。

夜10時47分俺は、知り合いの出版社から依頼の電話がかかった、内容は、俺が明日から調べようとしていた、『時間を止める能力のもつ男』についてであった、俺は、まだ払っていない家賃を払うためにその話にのった、それに、この仕事が成功すれば、給料と同時に、100万の金が入る、家賃も払えて余分に金が入ってくる、一石二鳥の話だった、そのあと明日の着替えなどを用意して、眠りについた・・・・。

2

ずぶ濡れになった状態で、自分の家に入る、すぐに服を脱ぎ捨てシヤワーを浴びる、左目につけていた、眼帯を外すと鏡に、紫色の右目がうつる、不気味にすきとおった、瞳、僕は、片目を閉じて、シヤワーを浴び続けた・・・・。

3

シヤワーを浴びた後服を着て、いつものように、掲示板を見る。

「止まればいいのに、すべて・・・・」

時計の針が止まった・・・・

続く

第1話 瞳

俺は、時間を止める能力を持つ男のことを調べている最中だ。ネ 3
ツトの掲示板にもこの噂でもちきりである、ある掲示板は、パンク
したという情報も流れている、だが、ほとんど信じていないか、半
信半疑でこのことを考えているようだ。

影野

「何とも言えない、僕はこのことを信じることはできない……
なかなかのお言葉だ、こんなに噂が広まっていると調べるにも調べ
られないな」

影野は、掲示板のコメントを見ている、どう考えてもあり得ない、
などというコメントもあった、だが、こんなに広まっていると他社
の雑誌もこのことを記事にしているかもしれないと影野は、考えて
いる、つまりこの情報だけをそのまま掲載しても面白くない、なに
か誰も知りえない情報がほしい。

影野

「あいつに頼んでみるか……」

影野は、靴を履いて、外に出た、昨日と変わらず雨が降っている、
階段を下りて1階、104号室前にきた

影野

「おい、いるんだろ、いるなら出て来い」
チャイムが付いていないアパートのため、ノックを何回もする

「なんですか、僕はいまやばい状況なんですから、帰ってください」
ドアを少し開けて、顔だけ見せている。

影野

「そんなこと言うなよ、長い付き合いじゃないか」
「だからやばいんですって」

影野

「なんでお前、右目に眼帯なんかつけているんだ、ものもらいか？」
「だから、やばいんですって、帰ってください」

影野は、無理やりドアを開けて靴を履いたまま、部屋に入ってきた。

影野

「お前……人を殺したのか」
「ちがいます、それは、僕の血です、DNA検査して調べてもらっても結構です」
布団の上には、血がべっとり付いていた、タオルも真っ赤に染まっている。

影野

「確かに、お前に人を殺せるような体力がないからな……お前に頼みたいことがある」
また紹介が遅れたが、こいつの名前は、武倉秀頼、このアパートの管理人をしている。

秀頼

「影野さん、家賃も払えてないのに、いきなり頼みたいことがあるとは、図々しいとおもっわないのか」

影野

「いや、今回お前が協力すれば、家賃も帰ってきて、そしておまけも帰ってくる、どうだのっ見る価値はあると思っただが」

秀頼

「何を調べればいいんですか？」

影野

「時間を止めれる能力を持つ男のことを知っているか？」

秀頼の顔色が変わった。

秀頼

「僕も……僕も止めますよ、影野さん……」

影野

「嘘を言っな、あほっ俺がそんな嘘に、だまされんでも思っただか？」

秀頼

「なら、止められなかったら、僕は、あなたの家賃の他水道代も払ってやりますよ、もし影野さんが負けたら……家賃を倍にしてもいいですよ」

自信にあふれている口調、だが、もし本当だったら、俺は借金地獄になることは、間違いない

だが、あいつがうそをついていることを考えるとこれほどのチャンスはないタダでこの部屋に住めるのだから……

影野

「いいだろう、その挑戦受けてやる」

秀頼

「では、やりますか、僕も昨日の夜、初めて分かったことですからあんまり期待しないでくださいね」

秀頼は、眼帯を外す……紫色？、秀頼の片眼が……紫色、俺は驚きの余り腰を抜かした。

秀頼

「では、止めて見せましょうか」
一瞬、目の前が暗くなる……。

影野

「何も起こっていないじゃないか」

秀頼

「外を見てください……」

俺は、部屋の窓から外を見た、不思議な光景だ、雨が止まっている、まるでガラス細工を見ているようだ、ずいぶん前に、仮面ライダーカブトを見た時と同じ光景だ。

秀頼

「どうですか、賭けは僕の勝ちですよね？」

影野

「いや、まで、俺は夢を見ているんだ、そうだろう」

秀頼

「夢では、ありません現実です」

俺は、そのまま驚きのあまりに気絶してしまった・・・
続く

第2話プロローグ

4

止まればいいのに．．．すべて．．．左目が紫色の男が、ビルの最上階にいる、鳥が飛びまわっている、雨がやんだことを意味していることがわかる、。

左目の男は、ケータイを取り出して、掲示板に予告をしている。

『午後3時に、1人の男を10秒以内に、殺す』なんとも残酷な文章、だが、1分間という指定された時間、まず不可能ともいえる。

男

「さあーショウタイムだ」

男がそういうとあたりが静まり返った、さっきまで、あれほど騒がしかった、この町が．．．物音一つも立てていない、飛びまわっていた、鳥が、止まっている．．．なんとも、不思議な現象が起こっている。

男

「ターゲット、あいつとあいつから．．．」

男は、ゴルフバックの中から、鉄の棒を2本取り出して、二つをくっつけてたら同時に、刃が、カマのように、刃が飛び出してきた。

男の姿は、まるで．．．死神のように見えた．．．

男は、ビルから飛び降りて、下にいた鳥の上に片足をつけて、また違う鳥に飛び移った、まるで空を飛んでいるみたいに飛び移った。隣のビルに飛び移り、そこにいた、男性の目の前にきた

男

「あんたには、ここで死んでもらう．．．悪く思ふなよ」

人

「誰だよおまえは．．．」

男は、カマを大きく振りかざしてその男の首をはねた．．．脈が切れて、血が噴きあがる、男の黒い服に、血がしみこんでいく、はねられた男は、その場に倒れた．．．

男

「10秒22．．．最初はこのくらいだろう」

男は、カマをもとの2本の鉄の棒にした、さっき、通ってきた道のりで帰って行った．．．

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4140f/>

時間を止める瞳

2010年10月13日17時55分発行